

猪苗代湖の形成史解明へ

猪苗代湖の形成史や環境の変遷などを調査しようと、福島大は湖心部の粘土の粒子を中心とした湖底堆積物の掘削と研究を開始する。湖底深くに残された堆積物から歴史をひもとく。5日に同大で開かれた定例記者会見で、同大共生システム理工学類の長橋良隆教授、広瀬孝太郎特任助教が発表した。

長橋教授によると、猪苗代湖は磐梯山の崩壊で約4万年前に形成されたと言われているが、堆積物を調べること、湖に水がたまった年代などを確かめるのたまった年代などを確かめられるという。また、堆積物には植物プランクトンなど珪藻の化石が含まれ、過去の環境の変遷を知ることができるといふ。掘削は水深約90メートルの地点で、フロート式台船上にボーリング機械を載せて作業する。湖底から約30メートルあるとみられる堆積物を掘削する。6日に掘削資材を

湖底堆積物研究 福大 第一スタンス

湖南港に搬入、来週から10月中旬ごろまで掘削する予定。研究は、2014(平成26)年度末ごろまでをめぐりに進めていく。同大学院共生システム理工学研究科が本年度スタートした「磐梯朝日遷移プロジェクト」の一環。研究は、早稲田大や滋賀県立琵琶湖博物館など国内研究機関と連携して進める。